

社
會

峰



九月号

第4卷 第4号

通卷 第29号

目次 ————— 九月号 —————

巻頭の言葉

正法の宣布か寺門の興隆か

.....

自我偶講義 △久遠の本仏と人間釈尊△その十

日高白象

大マンダラと本仏釈尊

日高白象

信仰体験談

粗末にした一幅のマンダラ

沢田覚象

立正安國と王仏冥合 △第三回△

国家諫曉と戒壇の建立

日高白象

信仰相談室

靈感信仰と本仏信仰

日高白象

編集後記

33

表紙題字・身延山法主猊下
表紙写真・インド靈鷲山へ渡つた身延山金銅の釈尊像

寺門の興隆か

最近、宗門では「護法愛宗」という言葉が盛んに呼ばれています。蓋し護法というのは正法を護持宣布することであり、愛宗というのは宗門を興隆し、寺門を繁栄させることなのでしょうが、然し護法と愛宗とは、実質的には決して同義語ではないのです。何故ならば宗門の興隆にしても本門の繁栄にしても、それは正法宣布の功德として与えられるものであつて、若し逆に宗門興隆・寺門繁栄を第一とするならば、却つて正法は伽藍とその組織の内に隠没してしまはず正安國の大生命もまた衰退してしまうほかはないからです。

夏の初めの頃のことでした。横浜の大乗物産の社長である猪瀬秀成氏が慶應病院に入院していると聞き、一日をさいて見舞いに行きました。彼は病床に横臥して「如是我聞」「六部疏」という部厚い法華經講讀の書物を一心に読み耽っていました。「入院中でもなければ、ゆづくり書物も読めないからね」と前置きしながら、氏は次のように述べました。

「私は社員をつれて屢々身延山に参詣している。然しそれは身延の大聖人におあいするためであつて、身延の伽藍や境内を見るためではない。今の宗門は伽藍を建立し護持繁栄させるためにキユウ／＼

か 布 の 宣 法 正

としている。然し宗門が打つて一丸となつても到底キリスト教のバチカンの宮殿のような伽藍を建立することも維持することも出来ないだろう。宗門や寺院の護持繁栄も結構なことだが、このために正法を手段としてはならないし、それとこれとを両天秤にかけてもならない。日蓮宗が世界に誇りうるものは伽藍でもなければ靈跡でもなく、法華經そのものであるはずだ。そして宗門戦力は金でもなければ組織でもなく、身命を捨てゝ正法を護持宣布する人材、世界中のあらゆる思想宗教と対決してこれを開会する人材、國家諫曉の祖願を継承する人材のほかはないはずである。

若し、かかる人材が宗門に払底しているのであれば、何はさておいても人材養成に全力をそゝがねばならない。今こそ宗門人は宗門の興隆、寺門の繁栄を計る前に、みずから戦力をかえりみ、正法の宣布に万全を期さねばならない。でなければ、どうして仏祖の顔貌を拝し奉ることが出来よう。

病軀をもかえりみない猪瀬氏の義憤と悲願に沸る言葉は、なおも静かにつづいていました。病室には夏なお涼しき風が吹き入つていました。

久遠の本仏と人間釈尊 へその十

大マンダラと本仏釈尊

日高白象



19

さて日蓮宗の寺院規則の第四条に、

「本寺院は宗祖奠定の大マンダラをもつて本尊とする」

と、宗門の本尊様式が、明確に規定されていますが

まさしくこの宗憲の通り、日蓮宗寺院・教会の須弥坦

一、南無妙法蓮華經のお題目の宝塔を中心として、そ

の左側に釈迦牟尼仏、右側に多宝如来という並座の二仏を配置した所謂「一塔兩尊」という本尊様式、

して像立し、これを本尊として安置しているのが常で

あります。

これら仏像々立による本尊様式の中には、

としても、ひいては檀信徒各家の仏壇にしても、殆ど

一様に大マンダラが本尊として勧請されており、さも

なれば大マンダラ中に勧請されている諸仏・諸菩薩

諸天善神等を、大マンダラ図表の座配のまゝに仏像と

して像立し、これを本尊として安置しているのが常で

あります。

一、この一塔両尊様式の上に、更に六万恒河沙の地涌團の菩薩の上首である上行・無辺行・偏行・安立行という本化の四大菩薩を脇士として配置した所謂「一塔両尊四士」という本尊様式、

三、或は更に迹化の菩薩團の代表である獅子の座の文殊支利菩薩、白象の座の菩薩を加えたり、或はまた持國天王・廣目天王・毘沙門天王・增長天王といふ四大天王を、東西南北の四隅に陣取らしめたり或は大マンダラの左右の梵字……この梵字は本来法格体のものであつて、人格体のものではないですが、それを愛染明王・不動明王と解釈して像立勸請している本尊様式。

なお大マンダラの左右の梵字を、愛染・不動とみなすこと自体、既に日蓮門下全般に真言密教思想が浸蝕していることを如実に物語つているものなのです。このことは重大な問題でありますので後に項を改めて述べてみたと思いますが……

三、或は更に迹化の菩薩團の代表である獅子の座の文殊支利菩薩、白象の座の菩薩を加えたり、或はまた持國天王・廣目天王・毘沙門天王・增長天王といふ四大天王を、東西南北の四隅に陣取らしめたり或は大マンダラの左右の梵字……この梵字は本来法格体のものであつて、人格体のものではないですが、それを愛染明王・不動明王と解釈して像立勸請している本尊様式。

三、或は更に迹化の菩薩團の代表である獅子の座の文

このように仏像による本尊様式には、きわめて雑多な類型を形成せしめるに至つてはおりますが、それらのすべては畢竟、大マンダラをそのまま偶像化しようとしたものであり、その様式に、たとえ広略要の相違はあつても、その中心が一塔両尊にあることには変わりはありません。

一塔両尊の本尊様式……この一塔のお題目（法）といふ四大天王を、東西南北の四隅に陣取らしめたり或は大マンダラの左右の梵字……これに日蓮大聖人の尊像（僧）を配して、仏法僧の三寶具足するところから、通常これを「三宝さま」と称していますが、この三宝さまなる本尊様式が、実は宗門における仏像本尊形態の一般であり、檀信徒の仏壇にも大抵この様式が用いられている今日であります。

それだけに、こゝで問題としてとりあげねばならないことは、一塔両尊の、この一塔のお題目なるものを固定化した形態とみなしてはならないということです

ます。少々長いようですが参考までに引用してみましょう。

一塔両尊の仏像様式、これを小学校の児童が一見してみても、お題目の宝塔が釈迦・多宝の二仏の中央に

あつて最も高く、二仏は宝塔の左右に騎士の如くにはべつているかに見えるので、あたかも宝塔のお題目へ

お題目の宝塔）が一番尊く、これによつて二仏が存在せしめられ、意義すけられ、価値すけられているのかのように見うけられち勝なことでありますよう。

そこで当然、法華經を信仰する人々は、一塔のお題目を本尊として修行するならば、我が身そのまゝお題目となるのみならず、宝塔そのものとも一体となり、釈迦・多宝の二仏の如くに成仏とする。という考えにもなることとしよう。

なるほど大聖人の御遺文の中には、佐渡在島中の文永九年三月十三日、阿仏房へ与えたと伝えられる御書があり、その中に、これと同様のことが述べられてい

今、日蓮が弟子・檀那も、またくかくの如し。末法に入つて法華經をたもつ男女の姿より外には宝塔なきなり。

若し然らば、貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華經と唱うる者は、我が身宝塔にして、我が身また多宝如来なり。

妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目は宝塔なり。宝塔また南無妙法蓮華經なり。

今、阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり。この五大は題目の五字なり。然れば阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、これより外に才覚無益なり。聞・信・戒・定・進・捨・斬の七宝を以つて飾りたる宝塔なり。

多宝如來の宝塔を供養し給うかと思えばさじては候わず、我が身を供養し給う。我が身また三身即

一の本覚の如来なり。かく信じ給うて南無妙法蓮華経と唱え給え。こゝながら宝塔の住處なり。經に云く「法華を説く處あらば、我が此の宝塔、その前に涌現せん」とは、これなり。

これによれば、お題目即宝塔、宝塔即お題目ということを前提として、お題目を唱える者は、老若男女、貪富貴賤をとわず、すべて我が身即宝塔、宝塔即我が身ということを主張し、更に人体をはじめ天地の森羅万象の悉くのものが、地水火風空の五大によつて形成されているとみなすところから、この五大を字数の上からそのまま妙法蓮華経の五字に配当して、行者即宝塔、宝塔即行者の義を普辯し、次いで宝塔そのものが

本来、多宝如来の宝塔であるところから、我が身もまた多宝如来であるとし、更に我が身そのまま「三身即一の本覚の如来」という久遠の本仏そのものと考えを飛躍せしめているのです。

こうした主張は、法本尊をたてまえとする自然主義

的な「観心すわり」の本覚法門であつて、遂には已身本尊に墮落した典型的な中古天台思想にはかならないものであり、勿論、大聖人の法門とは似ても似つかないものであることは申すまでもありません。

そもそも中古天台思想といふものは、伝教大師滅後の天台教學が、すつかり真言かぶれてしまつたものであり、この思想が我が宗門内にも浸蝕し始めたのは大聖人滅後百年から二百年にかけてのことであつて、ひとたび中古天台思想が宗門内部へ食い入り始むるやたちまちの中に本化の教風は、中古天台の邪義にすりかえられてしまつたか、と思われるほどの觀を呈して行つたのです。

甚しきに至つては大聖人の御遺文までも中古天台思想によつて統々偽作されて行きました。その數は今日龐大なものとなつています。それらの中、特に甚しいものゝ一つが諸法実相鈔の中の次の二文であります。

されば釈迦・多宝の二仏といふも用の仏なり。妙

法蓮華經こそ本仏にてはおわし候へ。經に云く「如來秘密神通之力」是れなり。如來秘密は體の三身にして本仏なり。神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし。凡夫は體の三身にして本仏ぞかし。仏は用の三身にして迹仏なり。然れば觀迦仏は、我等衆生のために主師親の三徳を備え給うと思ひしに、さにては候はず、返つて仏に三徳を蒙らせ奉るは凡夫なり。

これによれば、法本尊は直ちに己身本尊につらなり。凡夫こそ体の本仏であつて、觀尊ですら用の迹仏と下し、明かに下剋上の邪義を鼓吹するに至つてゐるのです。

こうした一連の偽作文献は、現存する大聖人の四百余篇の御遺文集中、甚だ多く混入して完全に整理されてしまふ。ために刊行されている御遺文集は、玉石混淆のまゝ、いまだに宗門教学は中古天台思想より脱皮出来ずにあるのです。

このようなことでは本化の宗風の、ふるい起りようもありませんが、蓋し、御遺文の偽作される動機の中には、或は大聖人の思想を善意に普遍しようとしたものもあつたかも知れません。たとえば建治三年八月の作といわれる日女御前御返事の中に、

こゝに日蓮いかなる不思議にてや候らん。龍樹・天親等、天台・妙楽等だにも顯わし給わざる大マングラを、末法二百余年のころ、はじめて法華弘通のはたじるとして顯わし奉るなり。これ全く日蓮が自作にあらず、多宝塔中大牟尼世尊、分身の諸仏、すりかたぎたる本尊なり。

されば首題の五字は中央にかゝり、四大天王は宝塔の四方に坐し、觀迦・多塔・本化の四菩薩は肩をならべ、普賢・文殊等、舍利弗・目連等は坐を屈し、日天・月天・第六天の魔王・龍王・阿修羅そのほか不動・愛染は南北の二方に陣を取り、悪逆の達多、愚痴の龍女一座をはり、三千世界の人

の寿命を奪う悪鬼たる鬼子母神・十羅刹女等、しかのみならず日本國の守護神たる天照太神・八幡大菩薩・天神七代・地神五代の神々、総じて大小の神祇等、体の袖つらなる。その余の用の神、豈に漏るべきや。宝塔品に云く「もろくの大衆を接して、みな虚空に在り」と云云。

これ等の仏・菩薩・大聖等、総じて序品列坐の二界八番の雜衆等、一人も漏れず、この御本尊の中に住し給い、妙法五字の光明に照されて本有の尊形となる。これを本尊とは申すなり。

と述べることによつて、大マンダラの儀相を説明しているのであります、このことは大聖人の御遺文中

本尊鈔の中で、
その本尊のいたらく、本師の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏・釈尊の脇士たる上行等の四菩薩・文殊・

弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化他方の大小の諸菩薩は、万民の大地に處して雲閣月

輝を見るが如し。十方の諸仏は大地の上に處したまう、迹仏迹土を表する故なり。かくの如き本尊は在世五十余年にこれなし、八年の間にも、たゞ八品に限る。

と述べられてはいますが、これだけでは大綱を示したまゝで、細部に亘つての説明は不充分という感を拭うことが出来なかつたためか、敢て大マンダラの儀相を説明した決定版というものを打ち出しておかねばならない要を感じ、前述の如き日女御前御返事の謀作となつたのであります。

然しながら、善意をもつて偽作した御遺文ではあっても、その抄に当つた人自身が、既に中古天台の思想をもつていたため、必然その結果には、中古天台の思想を盛り上げてしまい、大マンダラ左右の梵字を不動愛染と錯悟したことは、ともかくとしても、

「妙法五字の光明に照されて本有の尊形となる。これ
を本尊とは申すなり」

というように、法本尊を主軸として、妙法の光明に
照された当体も、悉く本尊であるといふ身本尊から
ひいては大マンダラ法界全体をも本尊の当体とみなす
に至つたのです。

これと同様に、一塔両尊の本尊様式を説明すべきよう

として「阿仏房ながら宝塔、宝塔ながら阿仏房」
という阿仏房御書が謀作されるに至つたのであります
よう。

要するに日女御前御返事は大マンダラの本尊様式を
普遍しようとして、阿仏房御書は一塔両尊の本尊様式を
普辺しようとして偽作され、結果的には中古天台の思
想を盛りあげて、宗門教学を混乱におとしいれてしま
つたのです。

阿仏房御書の思想は、

「妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目は

宝塔なり。宝塔また南無妙法蓮華經なり」

ということを前提として展開されていますが、これ
は明かに一塔両尊の、その一塔がお題目であることを
想定しているものとみなされましよう。

然しながら法華經本門八品靈山虚空会上の儀相をみ
るならば、宝塔かならずしもお題目ではなく、お題目
かならずしも宝塔ではないのです。

むしろ宝塔は、多宝如来の宝塔として二仏並座の座
となり、虚空会説法の終るや、東方の宝淨世界へ帰つ
て行つたものにすぎません。のみならず多宝如来が、
その名を「多くの宝」と示す通り、十方分身の諸仏を
総括し統一しているように、多宝如来の宝塔もまた、
仏舍利塔崇拝、經卷塔崇拝という多くの塔供養と、そ
の争いを止揚したものであり、多宝如来と共に、釈尊
の久遠開闢への橋渡しとなつているものなのです。

要するに多宝如来にしても、その宝塔にしても、釈
尊の久遠開闢の方便にすぎないものであり、方便にす

ざないものであればこそ、宝塔の中の多宝如来の、仏滅後における使命は、娑婆の衆生救済ではなくて、娑

婆において法華經を受持宣布するところ、瞬那にも東方宝淨世界より飛び来つて、

「善哉～、よいかな～」

と、その真実を証明するという侧面的段に廻つてい

るのです。

ちなみに仏舍利塔供養と經塔供養との論争は、仏

滅後、長い間つゞいていた歴史的なことであつて、そ

の二箇が法華經の第十章法師品等々の經典の中にも現われていますが、このことは本講の自我偈講讀中、「廣供養舍利」のあたりで改めて詳説したいと思つています。

ところで妙法蓮華經というのは、もとより多宝如來の宝塔のことではなく、むしろ多宝塔中、二仏並座した釈尊が、みずから久遠の本仏そのものとして、本仏の内証をそのまま顯現した本法そのものであり、

「釈尊の因行果徳の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す」

と大聖人みずから観心本尊鉢の中で言明されている通りのものなのです。

従つて、お題目と宝塔とは相即するものではなく、

阿仏房御書に、

「法華經の題目は宝塔なり。宝塔また南無妙法蓮華經

なり一

という義の起りようもないものなのですが、大聖人

が大マンダラを図體されるに當つて、本仏釈尊より発せられ法界全体に貫通し遍満している本法そのものを妙法蓮華經のお題目の五字七字として表現するのに、

並座した二仏の中央を、天地をつらぬくが如く、しかも法界無礙を現わす光明点をもつて大書されたことから、たま～これをそのまま偶像として像立するに際し、中央のお題目を宝塔として像立した、ところがこの宝塔をそのまま多宝塔と錯覚したところに大きなあ

やまちが起り、大聖人滅後、滔々として流れ来つた中

古天台思想とあいまつて、阿仏房御書のような偽作が造りあげられて行つたのであります。

従つて大マンダラを仰ぐにしても、或は一塔両尊とか一塔両尊四士というような大マンダラを仏像として像立した須弥坦を仰ぐにしても、中央のお題目を宝塔のように固定したもの、形尊的なものとみなしてはならないということは申すまでもないことです。

前号に重説するようですが、中央のお題目は、本仏駅尊より音声として発せられた本法そのものであり、光明として法界あまねく遍満している本仏駅尊の因果の功德そのものであつて、実は形として表現出来ないものなのです。

然し、それでは初心の人々には判りかねるところから、大聖人の偉大なる創意によつて、二仏並座の中央に文字として象徴され、更に大聖人滅後、大マンダラの偶像化に当つて、その文字が宝塔として建立せざる

を得なかつたのであります。

なお大聖人は確かに大マンダラを本尊として図顯し授与されたことは事実でありますが、本尊はあくまで一辺首題のお題目についても、はたまた駅尊一仏像にしても、一塔両尊、一塔両尊四士、等々の仏像様式にしても、本仏駅尊と象徴したものであるということを铭记すると共に、大マンダラ勧請の諸尊は、たとえ妙法の五字の光明に照されるとも、本尊ではない、ということを明かにしておかねばなりません。

次号は、多宝塔中に並座した駅迦・多宝の二仏の関係について觸れてみるとことにいたしましょう。

△以下次号▽

粗末にした一幅のマンダラ

沢田覚象



1

処となく憔悴の影がたゞよつてい
ました。

それは、もう七年の前の、昭和
三十五年十一月三十日のことでした。
突然、見知らぬ男の人が、私
の母の道場を訪ねて来ました。堂

名を浅井房蔵さんといふ、大根
折代乃さんの紹介で、福知山市
雲原（くもはら）という所から來
たということでした。

大根折代乃さんといえば道場の
縁代のお嬢さんであり、熱心な信
逞しい人でしたが、その姿には何

者さんでもあるので、日頃から互
に親しい間柄であつたのですが、

雲原といえば同じ福知山市内では
あつても、郊外も郊外、田舎も田
舎、かの酒天童子で名高い丹波の
大江山の麓に近い所です。

そういう遠い所から、わざく
道場を尋ねてきて来たというので

あれば、もとより信仰上の、ギリギリにまで追いつめられた大きな問題があつたればこそのことでしょう。

案の定、房藏さんの言われるのには、

「私の家内は君恵というのですが長い間、病いの床に臥していました。一向にラチがあきませんので國立病院に入院させますと、肝臓癌だと宣告されてしまいました。

一ヶ月ばかり入院して、その間尽される限りの手は尽してもらつたのですが、とうく國立病院でも見限られ、

——助かる見込みはありません。

どうせ死ぬのなら病院のベットよ

りも、自分の家の畳の上の方がよいでしょう。家につれて帰つて、本人のしたいように自由にさせなさい——

さい——

と言われてしましました。

実は今朝、退院したばかりなのですが、退院する時、同室の患者さんから、

——ここで癌といわれた上、サジを投げ出された以上、もう後は信仰にすがるほかはないでしょう。

私のお友達に大概祈代乃さんと家内の君恵は、退院したもの

病院の近くの親戚の家にあずけたやつて來たのです。

助けるてだても判らないまゝで思ひです。

信教で救われ、今は元通り元気になつて働いています。福知山市の石原(いさ)という所にいますか

ら、そこをたずねて信仰にすがつて御覧なさい——

と教えられたのです。

これは地獄の底で聞いた仏の声のようでした。私は、さつそく石原に大根さんをたずねました。そしてそこで此の道場を紹介されて

死の迫る病人を、手をこまねいて傍観しなければならないほど、つらいことはありません。病人の身になれば、なおさらのことでしょう。

家には四人の子供もいます。子供たちのためにも、家内を救わねばなりません。

どんなつらい修行でもいたしまずから、どうか家内を信仰の力で救つてやつて下さい」

房藏さんは泣きすがらんばかり

に訴えました。それは憔悴と絶望のドン底の中で、ワラをもつかもうとする訴えでした。

私の母は静かに聞き入っていました。そしてボツンと申しました

「あなたのお家の仏壇の下には、物入れになつた押入れがありますね。色々なものが入つてるようですが……」

それは、まだ一度も行つてみたこともない房藏さんの家の内が、まるで手にとつて見えるかのよう口調でした。

「はい、たしかにあることはあります、然し、それが何か……」

房藏さんは、いぶかしげに答えました。

「たとえ宗旨がどうあろうとも、

その押入れの中をさがせば、きっと、おマンダラが出て来るはずです」

「然し、そんなものが……」

再び打ち消してしまいました。

かにおマンダラが一幅あるはずで

経験しないことは誰しも自分の常識判断で、何もかも否定し勝ちなものです。

界のおマンダラです」

「いや、そんなものがあるはずはありません……私の家は代々禅宗で、誰もお題目を唱えたことはないのですから」

房藏さんは言下に否定しました。母は重ねて申しました。

「たとえ宗旨がどうあろうとも、

その押入れの中をさがせば、きつ

とかく経験主義の世の中では、

妻の癌という大病に絶望し、憔悴しきつて、ワラをもつかむ思いで、わざわざねくて来ていたはずの房藏さんでさえ、私の母に言われたことが、自分の常識にカチンと来るや、思わず抵抗を感じにはおられなかつたのでした。

こうした心の動きを感じた母はにつこりほらえみながら申しまし

た。
「あなたは、あなたの奥さんの病氣を治したい、と願つていたのですか。

そのためならば、あなたは、どんなにつらい修行でもする、と言われたばかりですね。

押入れの中のおマンダラをさがすことぐらい、何でもないこと

すことですがね」

かろうと、私には何の関係もないとえおマンダラがあろうと無

ことですがね」

この一言は、房藏さんの胸をつきさせました。房藏さんはハツと

襟を正しました。額に冷汗の吹き出で来るのが見うけられました。

——若し仏壇の下の押入れの中に

おマンダラがあつたとしたならば

それが妻の病氣と何か重大な関係をもつてゐるのではあるまいか。

ともかく有るか無いか、たしかめ

てみなければ——

そうと気付いた房藏さんは、挨拶もそこそくに飛び立つようにし

て我が家へ帰り、仏壇の下の押入れの内を、くまなくさがしてみました。

然し、いくらさがしても、それらしいものは見当りません。房藏さんは、がつかりしました。そして、

——おマンダラなんか、はじめから有るはずがないではないか——

と思い返しながらがら、空間にかたずけた押入れの内をフトみると、隅の方に四つ折りにされた一枚の紙が、すくけたまゝ床板にす

いついているのが目にとまりました。

——おマンダラなら軸物になつて

いようものを——

と思いながら、念のため、その

紙を開いてみると、それこそ、まぎれもない十界のおマンダラであつたのです。

「あつた／あつたぞ！」

思わず房蔵さんは叫びました。

母の言葉は見事に的中したのです
身ぶるいするような思いをした房
藏さんは、さつとおマンダラを
たずさえ、再び母の道場へ駆け
込んで来ました。

そして改めておマンダラを拝見
してみれば、身延山第七十八世の
法主であつた智等院日良上人が、
浅井儀山日忠上人の法功に対して
授与されたことが、その奥書きに

記し残されていたのです。

浅井儀山日忠上人、この方は実

は、房蔵さんの奥さんである君恵
さんの、お婆さんの兄さんによる當
人で、本来、浅井家の家督をつぐ
べき身であつたのにもかゝわらず
家督は妹に譲り、自分はみずから
日蓮宗の僧侶となつて全國を修行
して廻り、晩年、山梨県南巨摩郡
伊沼村の日蓮宗慈昭寺二十六代の
住職となり、七十六才で遷化され
ているのです。

私の母は、深い感概にうたれな
がら、次のように申しました。

「もと／＼浅井家は、法華經と深
い因縁があつたのですね。このお
マンダラが世に出た時、奥さんのが

病気もよくなつて來ることでしょ

う」

さつそく房蔵さんは、このおマ
ンダラを立派に表装しました。そ
して道場の御宝前にかゝげ、御神

酒、洗米、七色の野菜、水菓子、
御水をお供えして、今まで知らぬ
とはい、おマンダラを粗末にし
ていたことを心からお詫びし、こ
れからは夫婦一心同体となつて、
法華經の信仰を励むと共に、法華
經をもつて先祖の供養を尽すこと
を、心から誓つたのです。

あとで君恵さんの語るところに
よれば、おマンダラが発見されて
以来二日間というものは、床の中
にねいて、まるで全体が、

フワーと宙に浮いたような感じであつたということです。

勿論、これを契機として君恵さんの病気が、薄紙をはぐようによくなつて行き、国立病院で見難されていた肝臓癌という不治の大病

も、今では、すつかりよくなつてしまつていることは申すまでもありません。

これは、まことに不思議とも奇蹟とも思われるほどの靈的現象の事実ですが、それ以来、房藏さん夫婦は大の法華經の信者となり、毎月五日の道場の修行日には、大江山の麓から遠路もいとわず、仲よく連れ立つて道場に参拝すると共に、難病で苦しんでいた人があ

れば、わざくその家へ行つてまでも、自分の体験を通して法華經信仰をすゝめています。

いや、人の病苦を人ごとと思えないからこそ、信仰をすゝめずにはおられないです。

そして口ぐせのように言うことは、

「おマンダラほど有難いものはありません。御本尊は片時でも粗末にしてはなりません。たとえ神仏に關するものでなくとも、ものどいうものは一紙半紙でも感謝して大切にあつかわなければなりません」

「私は、死ぬような大病をしたおかげで、法華經の信仰に入ること

が出来ました。今では、この病気になつたことにも感謝しています。逆境にも感謝する心を持つことの出来たことが有難いのです」

2

この物語りは以上で終りますが、これを聞きながら、誰しも不審に思われることは、恐らく、

「おマンダラを粗末にすれば、死ぬような大病を起す、というほどおマンダラというものは、無気味なものであり、或は報復的な罰をあてるものなのだろうか――

ということでありましょう。

いや、決して、そういうものではないはずです。

——では何故、浅井さん一家において、そのようなことが起つたのか——

「——と、恐らく誰ぐべき家督までなげすて、発心得度し、日本全国を修行に明け暮れるほどの修行をして、後年日蓮宗寺院住職とまでなつた儀山上人が、繼ぐべくして繼がなかつた浅井家の、禅宗信仰の家筋の中に、一代の身をささげ尽したほどの法華經信仰を興さしめんとして大マンダラを入れたけれども、これをはばむ魔の兵衆どもが、遂に家族の者を法華經に近づけしめず、却つて報復的に、現代医学でもよくなし難い癌という大病を起さしむるに至つた

ものと考えられましょう。

また、そうであつたればこそ、

このおマンダラを掲げて法華經の

信仰を勵むや、またよく間に、さしもの難病も悉く消滅したといふこと、当然うなづかれることで

しよう。

その後、一家は益々繁榮し、当

時の四人の子供の中の、長男は東

京の早稲田大学に通い、長女と次

女は一緒に会社につとめ、末の男

の子も、はや高校三年生になつて

いるのです。

3

と仰せられています。これを言

さて世の中には、偶像崇拜を否

いかえすならば、一念三千の仏種

であるお題目を何ん口唱するところ

にも多いようですが、この物語りの一例をもつてしても、

「偶像は單なる物質のみのものでない。信仰をもつておがむ以上、

魂のこもつたもの、生きたものである」

と、力強く言うことが出来ましょ

う。日蓮大聖人は認心本尊妙の中

で、

詮するところは

一念三千の仏種に非ざれば

有情の成仏も

木画二像の本尊も

有名無実なり

る、一切衆生の成仏も可能となり
木像や画像の本尊をおがむことも
そのまゝ神仏そのものを礼拝する
に等しい、と申せましょう。

釈尊像は生ける釈尊の魂のこも
れる体であり、日蓮大聖人の尊像
もまた然り。大マンダラは久遠の
本仏釈尊を中心とする生きた益山
虚空会の世界であり、先祖のお位
牌もお墓も生きています。万物万
象は悉く生きているのです。世の
中は本来、物心一如の世界なので
す。

4

浅井さん一家のこの物語りは、
人ごとではなく同時に、すべての

人々の家庭の上においても同様に
言えることであり、引いては一国

の国土の上においても、あてはま
ることではないでしょうか。

中心を定むべく急がねばなりませ
ん。
日蓮大聖人の鏡心本尊鈔に曰く
今の白界叛逆

西海浸遁の二難……

この時、地涌千界出現して
本門の釈尊の脇士となり

一國浮提第一の本尊

この国に立つべし

と。国とは日本國、地涌千界と
は法華經をたもつ我々のことでは
ありませんか。

△おわり△

繁栄をもたらすことが出来ました
世界動乱の今日、今こそ、せめ
て日本国だけでも、法華經信仰の



立正安國と王仏冥合 ▲第三回▽

國家諫曉と戒壇の建立

日 高 白 象



これまで述べて来たことを総括すれば、日蓮大聖人の主張された仏法と王法（宗教と政治）との關係というものは、たとえば車の兩

車輪であるとか、鳥の兩翼といつたような、横の線にもとづく王仏冥合思想によるものではなく、あくまでも天と地、体と影といった

ような、縦の線にもとづく法王國従の立正安國思想によるものであつた、ということでした。

もとより立正安國というのは、正法法華經の眞実を開頭樹立し、

これを実踐躬行することによって必然その功德として現われて来る國家の安泰、国民の幸福を願うの

ですから、何はともあれ、まず須く正法の開頭樹立と、その実踐躬行に努力して行かねばならないことは、今さら申すまでもないことです。

そこで、もう一度こゝに正法開頭樹立の在り方と、実踐躬行の在り方について、ふりかえつてみた

いと思います。

7

申すまでもなく法華經は、本門と述門に分れております。述門は一切衆生の仏性開闢を示して從因至果の行を立てゝおり本門は釈尊の久遠開闢を示して從果向因の行を立てゝいます。

則ち述門では、衆生の立場を主

るといつたような一致の義ではなく、本門から述門を開闢するという、立体的な立場における一致の義なのです。

もつと端的にいうならば、久遠の本仏釈尊の世界を主体とし、この立場から一切衆生を救済する法華經を下して、地上に本仏の淨土を建設するという、あくまでも全

一年の生涯をつらぬいたものは、國家諫曉ということでした。

國家諫曉、それは一国を代表する指導者に対し法華經信仰をすゝめ、法華經精神にもとづいて、一國を指導統治せしむることになります。

向うという、いわゆる上から下へ主として、そこから成仏へ向うといふ、いわゆる下から上への法門であり、本門では、仏陀の立場を主として、そこから衆生救済へ向うという、いわゆる上から下へ

の法門です。

大聖人の法門は、そのいずれで

法華經本門の教えが既にそうで

ある以上、これを受持宣布する実践の在り方もまた、一向に上より下へという方向をとるようになるのも、蓋し必然のことでありま

す。しかし、これと並んで、一方で、國家諫曉ということでもあります。

ません。

然しながら国家を離れた個人はなく、また個人を離れて国家も成立しないのです。

「一即多」「多即一」という仏教の原理は、國家と個人という有機的関係の間において、最も雄弁に論証されましよう。

そこで同じ個人に法華經信仰をすゝめるにしても、末端の個人に対するよりも、まず一国を代表する指導的立場の人に対する方が、立正安國の直道であるということは多言を要しないところです。

大聖人一代の化導は、國家につては、まず一国を代表する為政者、地方にあつては地方を代表す

る守護・地頭、或は領主・郷族の長、或は仏教各宗の代表者、等々のあらゆる層の組織の中心部に対し、法華經の大信をすゝめ、折伏の門が開かれたのでした。

とは言つても、決して末端における大衆教化をないがしろにしたのではありません。在々所々において人ごとに法華經信仰をすゝめられて、その信仰増進に尽力されたことは、信徒へ与えられた数多くの御消息文によつても明かなところです。

蓋し、その運動の主流は、大衆運動を通して国家を動かすというのではなく、あくまでも組織の代表者を先づ教化して、そこから組織の大衆教化に及ぼうとしたこ

とあります。

このような行き方については、或は「封建的なやり方だ」と批難する声も起つて来るかも知れません。

然し、たとえば一家庭において如何に家族の人々が悉く法華經を信仰していても、その家長が頑強に反対している限り、一家の改宗は不可能に近いことなのです。

これと反対に、若し家長が強盛な信仰をしているならば、たとえ家族の中に反対する者があつたとしても、やがて一家の改宗も可能となるでしょう。

会社においても同様です。如何に従業員一同が法華經の信仰をし

ていても、社長自体が信仰していない。なければ、会社をあげての宗教運動、或は宗教を通しての平和運動、福祉運動も出来たものではあります。

これと反対に、若し社長が強盛な信仰をしているならば、たとえ従業員の中に無神論者がいたとしても、会社をあげて法華経にもとづく運動も可能となるのです。

このことは国家においても同様にいえることであり、国際間の紛糾している今日、一国をあげて世界を諫曉するほどの国家が建設されてよいほどです。

法華經信仰は、まず中心を定め筋を正すことにあります。一切主

中、如何に十方分身の諸仏が、そ

の教法を説き、その淨土を示しても所詮、方便の域を出ず、却つて仏教は混乱を來すにすぎませんで

した。

これに対して、ひとたび眾尊みずから、その久遠の本性を顯発するや、こゝを中心として十方分身の諸仏も、その眷属も、そしてその教法も淨土も開会統一せられて一大圓融の大マンダラ仏界が現成しているのです。

宗門七百年の歴史をふりかえつてみても、大聖人の二陣・三陣とつゞいて、國家諫曉を布教の一大眼目としている時代にあつては、たとえ法難は競爭起つたにしても確かに宗門は興隆していました。

これは形而上のことが、然し形而下においても理は同様である、国家においても会社・家庭においても、まず中心を立て、筋を正く、そこに法華經信仰を確立し

なければなりません。

若し、そうでなければ国家も会社も家庭も、遂には破れて行くほかないでしよう。

國家諫曉、それは七百年前の封

でも及んでいます。

そこで若し、宗門の興隆を計らふとするならば、須らく國家諫曉の力と勇氣を奮い起さねばなりません。地方布教・家庭布教にしても、まずその中心に当る長たる者を教化して行かねばならないのです。

蓋し、ここで注意しなければならないことは、教化しようとする相手が、大なり小なり、いやしくもその組織の中心にあつて、実権をきつた実力者である以上、殆ど当然といつてよいほど、それ相応なる権力と財力、或は名声というものをともなつてゐることであります。

権力・財勢に迎合したり、或はこ

れを利用しようとすると、微塵にも思つてはならないことです。

大聖人も開目録の中で、

檀那をへつらい怖ること

犬の主に尾を振り

鼠の猫をおそるゝが如し

國主・將軍に宮すかい

破仏法の因縁、破國の因縁

と、強く門下を説められているほどです。

ところで同じ口蓮門下であります

がらも創価学会は、王仏冥合を標榜して政権獲得をめざし、主権在

民、民主主義の時代の流れの中にその宗教団体の全組織をあげて政界進出に狂奔しているようですが

然しこれは、立正安國・國家諫曉

という、まことの誠の線より逸脱も甚しい、横の線の組織力をもつ

て、独善排他的野望を達成しようと/orする、いわゆる中國の放伐的な動きにほかなりません。

立正安國・國家諫曉とは、大衆

の力をもつ国を動かすものではなく、あくまで正法そのものの力と光りをもつて、國土開拓をなすものでありこそに転輪聖王の出現も期すことが出来るのです。

次号は「本門の戒壇建立」について述べてみましょ。

△以下次号▽

靈 感 信 仰 と 本 仏 信 仰

解 説 日 高 白 象

お た ず ね

一口に信仰といふものは、神仏と感應することであり、感應なき信仰は死んでいる、とまでも言わっています。

ところが、感應を主とする靈感者や、靈媒能力者を通して現われる靈なるものゝ中には、生靈だ、死靈だ、或は動物靈などという、非常に低級な靈ばかりが余りにも多く、その反面、崇高な靈は却つて稀でしかなく、たとえあつたとしても偽りである場合が殆どのようです。

従つて、このような原始的ともいわるべき靈感信仰の実態を見て

おれば、如何に宗教は神仏との感應であり、感應なき宗教はありえないと言つても、むしろ棄すべき迷信、淫祠邪教という感をいだかざるを得ません。

ところが、如何に靈感信仰が低級であるにせよ、靈感者（或は靈媒者）が純粹な心をもつて欲はない、しかも真剣な修行をしているならば、たしかに予言も適中することがあり、医者に見限られた難病患者も、奇蹟的に回復するといふことは、実際に起つてゐることであり、またそういう事実は決して少くはないのです。

却つて、難解な理論哲学をふりまわす宗教よりも、狂騒な法要儀

式をこじとする宗教よりも、むしろ宗教の生きた姿を見る思いさえ

するものであり、またそこに宗教の必要性が痛切に感ぜさせられるほどです。

すると、こゝに靈感信仰は否定すべきか肯定すべきか、迷わざるを得なくなつてしまひます。

若し肯定するならば、法華經でいう最も崇高な本仏信仰とは、一體どのように関連するものなのでしょうか。
それとも本仏信仰と靈感信仰とは、全く無関係な別々なものであつて、関連づけようとしているのでしようか。

おこたえ

「一切衆生は悉く仏性をもつてゐる」

と申されていますが、それは肉体をもつた衆生（人間をはじめ動物一切）に限らず、肉体をもたない衆生（いわゆる靈魂）についても同様にいえることです。

そこで特殊な靈感者、靈能者に靈魂に仮性がある以上、地獄・餓鬼・畜生の性もあるはずであり、性のある以上、相もあり体もあり力・昨・因縁・果・報もそなえているはずです。

つまり靈魂も、生きた人間と等しく十界・十如を具して、一念一念、刹那々に流転輪廻しているのです。

それらの靈の憑依した姿は、殆

のです。

そして世の中に、信れる者は誰

角よりも稀にして、迷える者は眞砂の如く溢れているように、靈界においても、世界へ入った靈は非常に稀であり、殆どの靈は、さまである靈、怨靈、惡靈、惡鬼となつて充満しているのです。

生靈や死靈、野鬼や蛇、猫といったような動物靈、或は惡道におちている厄神、等々が感得されるや無氣味な靈動を起しながら、不満や怨霊、悲しみや怒り、むさぼりや愚痴、悲しみや怒り、むさぼりや怨霊等々の言葉を口走るのも当然なことでしよう。

ど見るに堪えないものばかりであり、またその声も聞くに堪えないものばかりであつて、正常な人々

ならば、肌も粟だつ思いを禁ずることは出来ないことでしょう。

然しながら、このような憑霊現象における靈魂の、みにくい姿やその声は、独り低級な靈界に限つたことではなく、地上に生きた人間世界においても同様にみちあふれているのです。

聖人・覚者でもない一般凡夫の心は、悉く貪・瞋・痴の三毒五欲に犯され、日常生活も不満や愚痴悲しみや怒り、むさぼりや怨み、等々の憂悲苦惱に充满していますそれは成仏出来ないでいる靈の

心と、どれほどの相違があるでしょう。全く同じことではありますんか。

人間は、自分の心を肉体や、物質的な姿・形でかくしたり、こまかしたりすることが出来ます。或は他人と語りあつて慰めることも出来ましよう。

然し靈には、その心をかくしたり、こまかしたりする肉体も形ももちあわせがなく、また他のものと語りあうことも出来ず、孤独にしているのです。

人間も肉の皮をはぎとり、物質的ブエールをぬぎさつて、赤裸々な心そのものを白日にさらせば何

とみにくいことでしょう。憑依した靈と、どれほどの相違があるのでしょうか。

むしろ人間は、持つてゐる肉体や物質を駆使して、靈自身では出来ないような、恐るべき地獄・餓鬼畜生そして修羅斗争の様相をくりひろげているではありませんか。このように考えて来れば、靈的憑依現象を、たゞそれだけで低級だから、卑猥だからといつて否定することは出来ないでしょう。

靈感や靈媒によつて、うかうかとの出来る靈の世界、それは仏教以前の原始的宗教として、人間の生存する限り、永遠に実在するものであり、また如何に高邁にし

て深遠なる教理教学を説く宗教が

あつたとしても、到底この靈的存

在を否定することは絶対不可能な
ことなのです。

勿論、靈感現象がすべて正しい
ものとは限りません。靈感者や靈

媒能力者によつては、その人の我
見にもとづく見惑・思惑によつて

あやまつた憑依現象を起すのも決
して少くはありません。

むしろ、あやまつた靈感によつ
て、阿片の如き害毒を流すものゝ

方が、あまりにも多いほどです。
のみならず、たとえ正しい靈感
ではあつても、靈感だけでは窮局
の教済にはならないのです。

だからこそ、
だからこそ、

「正法によるべし。通力によるべ
からず」

という謡めも起きて来るわけで
あり、更に進んで、こうした靈的
現象を否定せずに、むしろこれを
正しく導いて行く高次の宗教が必
要となつて来るわけです。

さて久遠実成の本仏釈尊を本尊
とする法華經信仰は、一切の宗教
の中でも最も勝れた至上の宗教で
あるといわれています。

それだけに、最も低級だと思わ
れている靈感信仰とは、全くかけ
離れた、むしろ無縁のものという
感を、誰しもいだくことでしよう

ありとしあらゆるすべてのものを
も、一切の思想も宗教も、悉く包
括し開会統一するのですから、

靈感信仰も法華經に坂一してこそ
はじめてそのところを得ることが
出来ると言せましょ。

また現象界にしても靈界にして

も、三毒五欲にのたうち、迷魂・
惡鬼・惡靈が入りみだれており、
大聖人が立正安國論の中に、

「国土乱れん時は、まず鬼神乱る
鬼神乱るゝが故に万民乱る」

と仰せられている通り、あやま
つた宗教が跋扈跳梁するため、善
神は處を去つて再び帰らず、惡鬼
惡靈は增長して人心に食い入り、
こゝに世の亂れ、国土の亂れが続

発しておればこそ、今こそ本仏釈

尊を中心とする法華經信仰がうち

たられねばならないわけです。

大型人が因顯された大マンダラを御覽なさい。の中には悪運の摸索達多、第六天の魔王すらも勧請されているではありませんか。

まして靈感現象に現わされて来る小魔羅のような生靈・死靈や低級な動物靈、或は厄神等の憑依靈を法華經に帰一せしめて成仏の世界へ導くことは、努力次第で決して不可能なことではありません。

ところが、そうした因縁の憑依靈にぶりまわされている人々があまりにも多いようですが、そんなことでは法華經信仰も、いまだ決

定したものとは申されないでしよう。

なるほど本仏信仰は崇高です。

然しそれだけの観念に留つていては、まことの本仏信仰ではなく、むしろ独善的な禪天魔の類と軌を同じくするものです。

まことに久遠の本仏釈尊を本尊とする法華經信仰に入るならば、

本仏の毎日悲願の大慈悲心を感じるが故に、敢て地獄界・餓鬼界・畜生界そして修羅界という三惡四

惡の最底世界にまでも、身を挺して菩薩道を行じ、妙法の光りを伝えて行かざるを得ないであります。

以上これを要するに、靈感信仰

は個人的な現世利益を目標にして通力を主体としており、本仏信仰は世界全体の國土開闢を目標として菩薩行を主体としており、こゝに天地雲泥の相違はあります。然し靈感信仰を排斥することなく

一分も漏さずに本仏信仰へ開会して行くことこそ、本仏の仏使としての使命であります。

これがためには本仏信仰者みずから、如何なる靈感者、靈媒能力者をも、理屈ぬきに信伏せしめるほどの偉大なる靈性を堅持しておらねばなりません。法華經第二十

章如來神力品に曰く

編後記

鷺峰一九月号

昭和四十一年 第四卷 第二十四号
通卷 第二十九号

定価 五十円 送料 二十五円

昭和四十一年九月五日 印刷
昭和四十一年九月十日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井三区醜活園本妙庵

日 高 白 象

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

発行事務所

山梨県身延町波木井三区四一二二五

鷺峰会

電話（身延山）四五九番
振替（甲府）一一〇九三番

誌代 半年分
一年分 九〇〇円 四五〇円
贊助会費 三〇〇〇円
(送料共)
(分納可)

★八月になると六日の原爆記念日、十五日の終戦記念日がつゝき、至る所で平和集会が開かれる。今年は二十一年目。然し平和の見通しは暗い★「戦争は人間の心から起る。故にまず心の中に平和の砦を築かねばならない」とは、ユネスコ憲章の名文だが、蓋し「平和の砦」とは「法華經の法城」にほかならない★この法城の中心には本仏釈尊を中心とするお遍目的宝塔が建つてゐる★人類よ本仏釈尊に帰れお題目に舞一せよ。法華經をぬきにして世界の平和はあり得ない★七月下旬大阪街頭布教が終了し、八月一日より七日間、丹波福知山の滝に籠り、滝にうたれながら本説教書に専念した★八日には旧盆前後二週間に亘る福岡県下十数ヶ寺の寺院巡回布教のため九州へ西下する★人生は水の如く流れるが、河が何處をどう流れても河であるように、人生の一駒／＼もまた、正法を正法のまゝに受持する大マンダラの当所でありたい★やがて夏は去り秋がやつて来る。然し夏が秋になるのではない。夏は夏、秋は秋。何ものもこれを感じることは出来ない。△結願の日、妙法の滝にて白象▽